

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名：倉重 克明

論文「ジョヴァンニ・ヴェルガー語りの手法研究」は、自然主義期イタリアを代表する作家のひとりヴェルガ(1840年生-1922年歿)の創作理論と実践の両方を射程に収め、両者の間を往復しながら、ヴェルガがいかに自らの語りの技法を築いていったかを、作家の全活動期間にわたって跡づけようとした意欲的な試みである。第1章は、ヴェルガの創作理論を辿りながら、彼が「真実」の幻影を読者にあたえうる語りを探求し続けたことを明らかにしている。この幻影を生みだすべく、ヴェルガは作者の痕跡を消した没個性的な語りへと次第に向かってゆくが、「真実」とは単に社会に生きる個人の物語を客観的に外部から観察することを意味せず、むしろ物語の只中に生きる個人の情動にも踏み込みつつ、内と外を統合して知的に再構成したものにほかならなかった。この「真実」をヴェルガがいかに模索したのか、倉重論文は各創作年代の代表的長編小説をとり上げ、その各々の創作上の課題と試みを考察し、ヴェルガが過去の語り方を一挙に捨てず、微妙に変更を加えながら自らの技法を練り上げてゆく過程を克明に描きだしている。カターニャ時代の『炭焼き党员』を扱った第2章、フィレンツェ時代の『罪多き女』を扱った第3章、ミラノ時代の『エロス』を中心に扱った第4章、いずれも丹念な読みに基づきながら、細部の微妙な語り口が作り出す印象を、語り手の立ち位置(位相)という観点から、精緻に分析した上で、各章の主要対象たる長編小説の語りの特徴および主題との関連を、よく掘り出している。また、ヴェリズモ期の小説『マラヴォリア家の人々』および『ドン・ジェズアルド親方』を扱い、その語り方の違いを明晰に捉え、小説の各々の主題および創作理論との関連づけを説得的に展開した第5、6章も高く評価できる。

ただし、劇作家でもあったヴェルガの活動を「創作理論」と関連づけながら視野に含めることは可能だったろう。また、同時代イタリアの作家やフランス自然主義作家らとの関係なども、もっと視野に入れるべきであったろう。加えて、若干の訳文については改善の余地もあろう。しかし、上に述べた倉重論文の諸長所は大きく評価できる。また、倉重論文が広く先行研究文献を視野に含めつつ、鋭利な文体分析を武器に、小説家ヴェルガの活動を、途中に書かれた短編集も議論に引き入れながら、ほぼ網羅的に扱い、ヴェリズモ期の作品は言うに及ばず、それ以前の作品のもつ魅力と価値を申し分なく引き出した貢献はきわめて大きい。論文「ジョヴァンニ・ヴェルガー語りの手法研究」を起点とした、倉重氏の研究の今後のさらなる発展にも大いに期待が寄せられる。

よって、審査委員会は倉重論文が博士(文学)の学位に十分値するとの結論に達した。